## 第一節　松岡外相は最初は強硬な反独、親米主義者

松岡外相は若い頃からドイツに好感を持たず、外相就任当時に於ても「独逸人程信用の出来ぬ人種は無い」と公言して憚らなかつた。殊に平沼内閣時代ドイツは日本に軍事同盟を慫慂して置きながら、何等日本側の了解を受けもせずに、突如として独ソ不可侵条約を締結したことを、外交史上類例の少ない不信行為であると難じ、ドイツは他国を利用するに長け、他国に利用される愚をなさぬ人種であるから、これと手を握つた国は殆んど例外なしに火中の栗を拾わされたとも云つた。外相は又ヒトラーの「失われた植民地恢復」及び「中国門戸開放」の強硬な主張を警戒すべきだとし、ドイツ軍事使節団の中国に於ける活躍に対しても、激しい反感を持つていたから、松岡氏の外相就任当時に於ては、三国条約締結などの考が毛頭無かつたのだ。

松岡は又熱心な親米主義者で、太平洋を狭んだ二大国が固く手を握つて、世界の平和を確立すべきだとし、両国間に重大な利害衝突の無いのは、誠に喜ばしいことだとも語つていた。

然るにも拘わらず後になつて三国条約を締結したことは、一大矛盾であるかに見えるが、松岡の考からすれば、それが少しも矛盾でないとした。彼は曰つた。「条約締結はアメリカ上下に激しい反日感情を沸騰させることは避けがたいが、日本の真意が判明すれば、アメリカ人の心気は一転するであろう」とて、「此条約はアメリカと戦うためのものでなく、却つてアメリカを参戦させないことに依つて太平洋の平和を保持し、日米親善関係を確立しようとするものだ」と云つていた。この見当が違つていたことはその後の事実が証明しているが、松岡外相のブラフとだけは見らるべきでない。後日のことではあるが、外相は訪独に際し屢々アメリカ国務省筋と電報を交換したり、モスコウでは、スタインハート大使に頼んでルーズヴェルト大統領に電報を打つて貰つたりして日米親善施策に着手し、訪欧から帰ると、直ぐにアメリカへの旅を続けようともした。それは近衛首相と東条陸相とに依つて妨げられたばかりか、

間もなく第二次近衛内閣総辞職に依つて閣外に擲り出されて終つた。松岡氏の渡米が如何程日米関係親善を回復しえたであろうかは疑があるが、彼としては、自分がアメリカへ渡れば必らず成果を得られるものと堅く信じていたもののようである。それが松岡氏の強い自負心から出たことは疑ないとしても、その親米主義者たることを示す一事実たるを失わない。又後にも説明する通り松岡はスターマー及びオット両ドイツ代表に対し、「三国条約は戦争のための条約ではないから、万が一これあるがため日本が戦争をせねばならぬようなことになれば、日本は此条約を廃棄するかも知れぬ、殊に日本はアメリカとの戦争を絶対に避けるであろう」と告げ、ヒトラーにその旨を報告して置いて呉れるよう依頼している。三国条約を締結しながらアメリカと親善関係を保てるものかどうかの理窟は別として、それも彼の親米主義の表われである。

かほどな反独親米主義者が何故三国条約を締結し、ドイツと結んでアメリカと抗抗するに至つたかは、次に説明すべき問題である。これを結論的に見れば、外相年来の主張たる東亜新秩序建設に熱心なる余りの行過ぎと、陸軍及び輿論の力に抗し切れなかつた弱さにあつたものと云うべきであろう。



## 第二節　何が松岡外相を三国条約締結へ持つて行つたか

前節所述の通りにひどいドイツ嫌いの松岡が、外相就任後僅か一二ヶ月で豹変して、日独伊三国条約を締結する気になつたのは何故か。これが松岡の外交理念とその背景をなす当時の客観情勢との面から観察されねばならぬことであるのは云う迄もないが、他面松岡の特異な性格を離れては説明しかねる問題でもある。

### 第一、松岡の特異な性格

松岡は所謂秀才型に属した頭の良い男だ。彼は子供の頃からアメリカに渡つたが、「急に外交官になりたくなつて」（これは松岡自身の言葉である）帰朝、外交官試験を受けた。当時は受験者も二百名程の内から数人を採用するに過ぎなかつたから、余程の秀才でなければパス出来ぬものとされていたに拘わらず、ほんの数ヶ月の自習で日本の法律の知識を得た松岡は、帝大あたりの優等生を尻目に、首席で及第している。この一事だけでも彼れの秀才振りがわかる。

彼れの記憶力は絶倫で、何事にも意見が立つ。その内には誠にすばらしいものがある。彼れの恩人山本条太郎に云わせれば、三つに一つは誰も考え及ばぬようなことを考える、然しながら彼には幾つかの際立つた缺点が有つた。顕著な二三を指摘するならば、第一に、自信が余りに強かつた。「おれ」がやれば何でも出来る、「おれ」は外交の才能では誰にも負けない。こう云つた考え方が彼れの行動を無軌道にし勝であつた。彼は嘗てこう云つた。「僕は議論では誰にも負けたことが無い。又誰の前でも気おくれなどしたことが無い。然しこれには唯二人の例外がある。一人は山県（有朋）元帥、もう一人は山本条太郎（三井王国の大番頭で、後には満鉄総裁で辣腕を奮つた）だ」と。山県、松岡の関係を私は知らぬ。山本、松岡の関係は、知り過ぎる程良く知つているが、松岡の云う通りだつた。